吉野川を見る・聞く・学ぶ 現地見学バスツアー

全5回の講座の最後を締めくくるのは現地見学会。洪水遺産や歴史的建造物など流域の防災風土資源を巡り、史実から学ぼうというものです。題して「吉野川歴史探訪バスツアー」、さあ、出発です！

まるで一枚岩のように積み上げられた田中家住宅の高石垣

講師の松尾裕治さん。バスの中、現地でも、多くの資料を紹介しながら、熱心にレクチャーくださいました

❷田中家住宅
日曜・祝日の10時～16時30分、見学可能（要予約）。平日は要問合せ。見学料は大人300円、小学生以下無料。ガイド付きの場合、大人500円、小学生以下300円。《問》田中家 ☎088-674-0707

澄み渡った青空の下、12月7日12時30分、バスツアーがスタートしました。レクチャーをしてくださるのは、香川大学防災教育センター及び四国防災共同教育センターの特命教授を務める松尾裕治さんです。

バスの中で四国や吉野川の地理的特徴などのレクチャーを受けながら、まず最初のポイントに到着。徳島市国府町にある高地蔵です。堤防がない時代、洪水が頻繁に起こっていた下流域では、お地蔵さんが水に浸かったり流されたりしないようにと、高い石の台座の上にお地蔵さんを設置しました。高さ1m～2m以上のものまで約190もの高地蔵が現存するとか。見学した高地蔵は全高4・19mもあり、お参りする人を見下ろすその姿から「東黒田のうつむき地蔵」の愛称で地元の人々に親しまれています。見上げるばかりの石像は、これほどの水位の洪水に襲われていたという証拠。先人達の苦しみに胸をつかれました。

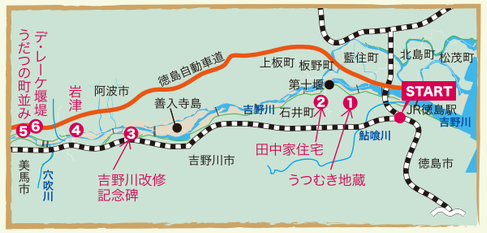
❶高地蔵（うつむき地蔵）
文化8年（1811）建立。周囲をやさしく見守るように立つ石仏からは、人々の祈りが伝わってきます。高地蔵は吉野川南岸の低平地に多いとか。

藍作がさかんだった名西郡石井町藍畑に残る「田中家住宅」が次のポイントです。田園風景にたたずむ立派な屋敷――まず目を引くのは、人の背よりはるかに高く築かれた石垣。南北約50m、東西約40m、二千平米もの敷地をぐるりと取り巻く高石垣は、洪水から家を守るための備えです。「阿波の二大石である青石、撫養石を使って、紙一枚も通さないよう隙間なく積まれています。川に近い方ほど高く作られてるんですよ」と案内してくれたのは、17代当主の田中誠さん・邦子さんご夫婦。田中家は約390年前、藩の藍作奨励のため招かれた藍師のひとり・播磨屋与右衛門を初代に、代々続いた藍師の家。母屋を中心に土蔵、納屋、番屋、藍の寝床、門などが取り囲む典型的な藍屋敷の造りで、11棟の建物すべてが国の重要文化財に指定されています。

安政元年（1854）から約30年の歳月を費やして建設した田中家には、洪水と闘ってきた先人の知恵がいっぱい詰まっています。母屋は茅葺き屋根で、洪水で水が屋根までくると、屋根が浮き上がって船の代わりになるようになっています。また、藍納屋の軒下には船が吊られており、これが救助艇の役目をするのだとか。邦子さんによると、「今年88歳になる母が、嫁いできた翌年、大きな洪水があり、おにぎりを作ってこの舟で配った」とか。決して遠い昔の話ではないのだと実感しました。

吉野川の恵みと脅威は表裏一体。藩の財政を支えた阿波藍の裏には、まさに命をかけた人々の苦労があったのです。

茅葺きの重厚な母屋。現在も田中家の人々が暮らしている（写真右下）洪水に備えて軒下に吊るされた舟（写真左下）案内してくださった田中邦子さん



❸吉野川改修記念碑
吉野川市山川町のほたる川河畔に立つ記念碑。当時の徳島毎日新聞が「太平楽を謳歌する吉野川自然の大平野、それでも自然は征服されぬ」と報じています。

暴れ川・吉野川の爪痕は流域の建造物などにたくさん残っています。吉野川市山川町諏訪にある吉野川改修記念碑もそのひとつ。岩津から河口まで約40kmの堤防の骨格をつくった吉野川第一期改修工事は明治40年に始まり、約20年間の歳月をかけ、昭和2年に完成しました。この改修途中にやってきたのが大正元年（1912）の大洪水。記念碑のかたわらには洪水の頂点を記した石柱が立っており、側面には、「八尺七寸（約2・6m）」と浸水が記録されています。

吉野川に架かる岩津橋を渡って、左岸（北岸）へ。岩津は池田～徳島間のちょうど中間に位置し、川幅がもっとも狭くなる場所です。藩政時代には筏や船の監視をする御分一所（税関）が置かれたり、近世でも昭和中期まで「岩津渡し」が置かれたりと、昔から交通の拠点として発展してきた地です。と同時に、川幅が狭い上、南岸には山が迫り洪水の逃げ場がないため、氾濫に苦しめられてきた地でもあります。現在、岩津は吉野川の流量を計る基準点に定められており、治水・利水の拠点となっています。

この日は松尾さんの案内で、川を見渡して立つ石灯籠や渡し場跡、岩津の淵の主といわれる大なまずを詠った岩雲花香の歌碑、そして普段は目に留まることの少ない水位観測点などを見学しました。この水位観測点で計測される流量データは、国土交通省徳島河川国道事務所ホームページの「岩津水位観測所」のページで公開されています。

❹岩津
灯台の役目をした石灯籠。美しいシルエットを見せるのは山川町と阿波市阿波町を結ぶ岩津橋。阿波市阿波町乙岩津にて。

ツアーも終盤。江戸から明治にかけて、吉野川の水運を利用した藍の集散地として栄えた脇町の「うだつの町並み」を見学後、吉野川の支流・大谷川にある「デ・レーケ堰堤（大谷川堰堤）」に向かいました。日本の近代治水の祖といわれるオランダ人技師ヨハネス・デ・レーケは、徳島にも約3週間滞在して調査を行い、『吉野川検査復命書』を著しました。後の吉野川改修工事の基礎となったもので、これをもとに、吉野川流域には多くの堰堤が築かれました。デ・レーケ堰堤はその中で最大規模、そして現存する唯一のものといわれています。

「石が丸くなっとるな」「水に削られたんやな」――一世紀にわたって人々の命を守り続けた堰堤を歩いて記念撮影。吉野川の治水の歴史、先人達の知恵にふれることができ、有意義な一日となりました。

❺うだつの町並み
重要伝統的建造物群保存地区に指定された歴史的町並み。本瓦葺・白壁造、防火用の袖壁「うだつ」を掲げた重厚な屋敷が400mにわたって並ぶ。右写真は、荷の積み降ろしを行った舟付門。当時は町並み付近まで吉野川が入りこんでいたことを物語っています。

❻デ・レーケ堰堤
柳並木がそよぐ大谷川沿いを北へ約1kmさかのぼると見えてきます。長さ97m、高さ3.8m、下流にむかってゆるやかな弧を描く石積みの三段堰堤です。平成15年、国の登録有形文化財に指定。周辺は親水公園として整備され、春にはチューリップが咲き誇ります。（参加者記念撮影）